



令和6年度の修学旅行を振り返って!!

先月の6月には二つの大きな学校行事がありました。修学旅行と川越方面への校外学習ですが、今回は3年生の修学旅行に焦点をあてて振り返ってみます。

当日は佐和駅近くに集合しましたが、印象に残る幕開けとなりました。6時半をほんの少しだけ回った時間帯に緊急地震速報が鳴り響きました。その場には3年生のほかには、引率者と見送りの教員が合わせて20人はいたでしょうか。そのけたたましさに、生徒ともどもに、一瞬、みな顔を見合わせました…。

さて、今回の修学旅行、いつものことながら、携帯電話等の持参はなしでしたが、今の若い世代は、みな物心がついたときには、目の前に情報端末があります。普段、自分専用のものを持っている生徒も多いでしょうから、手元にスマートフォン等がないほぼ「アナログ」の状態で約三日間を生活する経験は、逆に新鮮なものだったかもしれません。約30年とちょっと遡れば、ほぼ誰も持っていませんでしたが、時代も変われば変わるものです。どのような感想をもったのか、この点にしばって聞いてみたいところです。

気がつけば、修学旅行に引率に行った先生たちの中にも、すでにこの便利なものがなかった時代を知らない先生も、一人や二人ではなさそうです。

世の中は進歩・発展し続けます。十年先はおろか、一年先のこともどうなっているのか読めませんが、この先の未来が「闇」ではなく、今よりも明るい「光」が射していることを祈ります。



↑ **There were a lot of people around the *Todai-ji* Temple, even though it was on a weekday.**



修学旅行で印象に残ったことのもう一つは、食事の場面です。コロナが5類に移行されたとはいえ、約3年間の様々な制限が与えた影響は実に大きなものがあります。コロナが流行り始めた当初、令和2年にはマスクの着用を習慣づけるのにはかなり時間がかかりましたが、いざそれが定着すると、これを元に戻そうとしても中々もどれない、新たな文化が学校には出来上がっていました。その一つが、給食時に一つの方向(前)を向いて食べる習慣です。先生たちが以前のように向かい合って食べるように指導をしても、恥ずかしいやらなんやらと理由を口にして、中学生は、この数年間で手にした食べ方に頑なに固執するところがあります。全員が同じ前の方を向いて食べることが板についてしまいました。しかしながら、修学旅行の場では、朝食・夕食ともにホテルのテーブルでの食事なので向かい合って食べざるを得ません。この条件下で生徒は特に文句を言うこともなく、普通に向かい合って食事をとりました。

このことから分かったことは、そうせざるを得ない環境さえ整えば、人間はそうするものだということです。これを機に学校でも向かい合って食べるようにしようと言っても抵抗されるような気が多分にしますので、無理強いをする気はありませんが、…。

このまま行けば、何十年か後に「昔は向かい合って給食を食べていた」と話をすると、未来の子どもたちには驚かれるのかもしれません。習慣や文化が形となるには *Epoch-making* となる、何がしかのきっかけめいた出来事があるような気がした次第です。



智仁武勇



生活の柱：時空人の「間」を照らす - 時「間」・空「間」・人「間」

Key Word：時と空 人の間を 燦々と 照らし続けて 輝かす今



6月11日、12日に共働委員によるプール清掃が行われました。バケツで水を流したり、ブラシで一生懸命に床を磨いたりする姿がありました。約1時間30分の活動でしたが、「みんなのために」という意識のもと働き続ける共働委員のみなさんは本当にすばしかったです。多くの人の頑張りがあって水泳学習ができます。「感謝の気持ち」を大切にしたいですね。



避難訓練（不審者対応）が6月11日（月）に行われました。不審者役の先生の好演もあり、真剣な表情で訓練に臨む生徒たちの姿が見られました。校内に不審者の侵入を伝える放送が入ると、生徒たちは各教室で不審者の侵入を防ぐためにバリケードを作って静かに待機していました。



6月3日（月）～5日（水）、京都・奈良方面への修学旅行がありました。3年生にとっては待ちにまいった修学旅行でしたので、三日間、笑顔が絶えることはありませんでした。現地での活動を通して、京都・奈良の伝統と文化を肌で感じることもできました。そして、修学旅行を通して学級の絆も深まりました。

令和6年度のひたちなか市総合体育大会が一通り終わりました。毎年のことながら勝負の世界には結果がつきます。誰しも試合が終わってから、それぞれに様々な想いにかられるかと思いますが、一つ感じたことを書きます。

大会前日の練習に足を運んだ際に、とある部活動で顧問の先生が部員に向けてつぶやいていた言葉が印象に残りました。その言葉とは「自分の方へ運を引き寄せ（られ）るように」というひとことです。「なるほど、勝負事は実力もさることながら、運をいかに呼び込むか、そこが大切だ」という、こういう次元での指導をしていることに感心しました。

実際に試合を見て実力差は感じなくとも、最終的には白黒がはっきりします。できることならどの競技においても、佐野中に軍配が上がってほしいと思いましたが、少しでも自分の方へ流れを呼び寄せるためには普段からどうしたらよいのでしょうか。日常生活を柱に、次に向けて今からできることがあるかもしれない、と感じさせてくれた今年度のひたちなか市総体でした。



◇ 数字の3にまつわる話：ひたちなか市にある「国営ひたち海浜公園」は平成3年に開業。今年は、それから数えて33年めになります。